

小学生と考える「北斗市のまちづくり」

第3回

市民協働のまちづくりを進めていくためには、多様化する行政課題を市民のみなさんと共有し、地域の特性を活かした地域住民による主体的活動が大変重要です。広報ほくとでは、次代を担う子どもたちが市民に身近な社会問題や行政課題に関する理解を深め、「わたしたちにもできること」という視点で解決策を話し合い、考えていただいた内容を連載し、市民のみなさんと一緒にまちづくりを考えていきたいと思います。

第3回 谷川小学校6年生のみなさん

考えてもらった地域課題 わたしにできる災害への備え

北斗市では、住んでいる地域によって想定される災害に違いがあり、そのため防災に対する意識も地域により差があります。

「自分のところは大丈夫」という考えで、災害への備えをおろそかにしてはいけません。直接の被災はもちろん、胆振東部地震でのフラックアウトのように、家屋の損壊などの被害がなくても、インフラが停止し、普段通りの生活ができない場合があります。一人ひとりが災害への意識をしっかりと持ち、災害発生時に自分の身を守るようにしておくことが望ましいです。

今回、谷川小学校のみなさんには、災害に備えて自分で何ができるかを考えてもらいました。

自然災害に対応するためには、市民一人ひとりの活動や地域内の協力による活動が重要です。災害による被害をできるだけ少なくする(減災)ためには、「自助」、「共助」、「公助」3つの連携が必要であるといわれています。

この「自助」の取組みとして、「家庭でできる防災」について考えてもらいました。

家庭での災害時の決め事

災害時に家族の誰がどうするかなど、家族で話し合いをしておくことはとても大切です。話し合いをしておくことのメリットにはどんなものがあるか、子どもたちに考えてもらいました。

- 家庭での話し合いのメリット
- 災害時にどうするか決めておけば、災害が起きたとき、冷静に考えて行動することができ。
- ひとりの時に災害が起きたらどうやって連絡を取るかなどを日頃から話し合っておけば、困って動けなくなるようなことを防げる。

この他にも、地震が起きたときに家の中が安全であるように、ドアをふさいでしまうような位置に家具が配置されていないか、また家具など



● 具体的にどんなことを家庭で話し合っておくとよいか

- 避難場所の確認や、避難場所までの経路と移動方法。
- 家族の連絡先と連絡方法。
- 家に子どもがいないときに災害が起こったときは、どこに行けばいいか。どう行動すればいいか。
- 避難時の持ち物。
- 学校にいるときや、部活動をしているときなどどうするか。

家庭での備蓄

家庭でできる防災として、災害復旧までの数日間(最低3日間)を生活できるように家庭で食料や燃料などを用意しておく「非常用備蓄品」と、避難時にすぐに持ち出せるよう「防災セット(非常用持出品)」を備えておくことが大切です。

- なぜ家庭で備蓄をしておくことが必要か
- 避難したときに支援物資がすぐに届くわけではないから。
- 災害時に自分に必要なものがないと困るから。
- 水・食料がないと生きていけないから。
- 自分で自分の命を守るように。

○防災専門官の防災リュックの中身



- トラロープ □ガムテープ □ライト・ランプ □カッター・筆記具 □ビニール袋 □着替え(下着類) □タオル □水 □非常食 □乾パン・甘いもの □医薬品 □衛生用品(歯磨きセット・ドライシャンプー等) □マスク・ゴム手袋 □ビニール合羽 □カイロ・ハンドクリーム

★防災リュックは、季節なども考慮し、自分だったら何が必要か考えて準備しましょう。



○どんなものを準備すればよいか
実際に防災専門官がどんなものを防災リュックに用意しているかを見てもらい、どんなものがあるかというかを考えてもらいました。

- 食べ物(カロリーが高いもの、リュックに入れやすい小さいもの)
- 新型コロナウイルス感染症対策のためのマスクや消毒グッズ
- ガムテープと油性ペン(ものを留めるテープとしてだけでなく、メモ・目印などにもなる)
- 家族に赤ちゃんがいるので、おむつとミルク
- 薬(普段から飲んでる薬)
- 眼鏡(何も見えなくなると危ないから)
- 気づいたこと
- 防災リュックとして売っているものでなくても、自分の使い慣れているリュックでもいい。
- 100円ショップでも買えるものはちよつとずつ準備したい。

防災への意識を地域のみなさんが持つには

北斗市では、地域により防災への意識に差があることが課題の一つですが、自分だけでなく、他の人にも防災の意識を持ってもらうために、6年生のみなさんができることを考えてもらいました。

- 学校でできること
- 校内放送で呼びかけをしたり、避難する際に必要なもののチェックリストなどを配布して、学校全体で防災意識を高めるような活動をする。
- 防災への意識を地域の人にも持つてもらえるようにできること
- 防災について学んだことなどを、家の人や近所の人にも伝える。
- 避難訓練を地域の人もやるように呼びかける。
- 普段から地域の人も防災について話し合う。
- 地域のお年寄りに防災リュックをつくる手伝いをする。
- ポスターを描いてみんなに伝える。
- 動画をつくって発信する。
- 地域のみなさんで災害時に助け合えるような関係を築くために
- 日頃から近所の人に挨拶する。
- 助けが必要なお年寄りや普段から接する。

あとがき

谷川小学校6年生のみなさんが、防災授業で実際に備蓄品やテントに積極的に触れようとしていたり、友達と真剣に話し合ったりしながら授業に取り組み、防災について大いに興味を持ってくださったことを嬉しく思います。

昨年、北海道において日本海溝・千島海溝沿いを震源とする巨大地震の発生に伴う被害想定が発表されました。北斗市でもこれまでより浸水範囲が広がり、被害の拡大が見込まれることから、日頃からの防災用品の準備は非常に重要です。

防災を意識しなければならぬのは決して大人だけではありません。子どもの視点から気付く防災もありますし、子どもが率先することで大人を動かすことにつながる場合もあります。市としては、小さなころから防災意識を身に付けてもらうために、これからも防災教育に取り組んでいきたいと思えます。

今回、谷川小学校6年生のみなさんにも考えていただいたように、北斗市に住む一人ひとりが防災の意識を持ち、さらには地域に目を向けて、突然の「まさか」に備えていただければと思います。

(総務課長 小坂 正一)